とになつたこの宣元至本經と大聖通眞歸法讃とは、各々それに附けられた識語によると、前者は開元五年、後者は同八年に傳寫せれたのである。尊經に記された通眞經がこの通眞歸法讃ではないであらうかといふのは、余の單なる推測に過ぎぬのであるから、これは暫く別としても、尊經の識語に據る限り、開元五年(717)に傳寫した宣元至本經を譯出した時、卽ち少くとも開元五年かもしくはその前幾年かには、勿論景淨は在唐したのでなければならぬ。

然るにこの景淨は、景教碑文の選者としてその初めに名を記してゐること周知の如くであるから、その碑を作つた建中二年(781)にも唐にあつたことといふまでもないが、その後貞元二年(786)にも尚ほ在唐し、佛典大乘理趣六波羅蜜の漢譯事業にも、かの般若三藏と共に從事したことはよく知られてゐることである。[8] さうすれば彼の在唐は甚だ長期に亙つたのであり、また甚だ長生した人と見ねばならず、假りに開元五年をこの宣元至本經を譯出した時としても、その事業の性質上、その頃最も若く見ても二十五歲位には達してゐた人と考へるべきであらう。開元五年に二十五歲とすれば、貞元二年には九十四歲であつたことゝなる。九十四歲もしくはそれ以上の年齡で、なほ飜譯事業に從事することは、有り得ない事ではないにしても、殆んど稀有のことゝ認めねばなるまい。

抑もこの宣元本經を「譯」された經とすることは、曾て志玄安樂經の解說に於ても述べたやうに不當であつて、原本があつて、それから漢文に譯出したものでないのは言ふまでもないけれども、それは景教義をも取り入れて說述したのであるから、景教を宣傳する必要上「譯」として流布せしめたものとして承認するとしても、それには拘はらずこの尊經の識語には種々檢討しなければならぬ點がある。抑もこの識語の書かれたのは何時のことであらうか、これを尊經の書體と比較して見ると、兩者の同一筆であることは、Moule 氏の否定してゐるに拘はらず、疑